〔中国の絵画展によせて〕

中国絵画と雪舟

この秋に大和文華館では雪舟展を開きました。

そこに出陳されていた四季山水図四幅対は、室町水墨画としては異例に大きな掛幅の絹絵で、その画風は中国画を思わせる重厚なものです。雪舟は、応仁元年(1467)48歳のとき山口より明へ渡り、二年ほど滞在しました。この図の各幅には「日本禅人等揚」と記されていることから、雪舟入明中の作と考えられています。またそれを裏付けるように中国人の鑑蔵印「光沢王府珍玩之章」も画中に捺されています。

さて雪舟は、もっぱら水墨の余技的人物画を描いた黙庵らの禅余画家を別とすれば、もっとも中国絵画に接近した日本画人といえます。とくに中国の鑑賞絵画の主流である山水画に限れば、雪舟は中国の絵を直接的に学んだ初めての画家です。いうまでもなく雪舟は禅僧で、本務は禅の修業なのですが、彼は画家として歴史上に名を残し、彼を禅余画家と呼ぶことはためらわれます。そして中国へ渡った目的も、本場中国の画を学ぶことにあったのです。つまり雪舟ほど積極的に、そして本格的に中国絵画を学んだ画家は日本絵画史上いないし、彼は画家の目で中国の自然や人々を眺め、脳裏に焼き付けて帰国したのです。

さてその雪舟が中国留学で得たものは何だったのでしょうか。

もっとも大きなことは、絵画制作の技術ではなく、画家としての自信でしょう。雪舟の前身と考えられる拙宗等揚の諸作例や、渡明直前の制作とされる、龍崗真圭賛「山水図」(先号の美のたより参照)からは感じられない大画家としての自信と気魄が「秋冬山水図」以下の作品にはみなぎっています。

龍崗真圭賛「山水図」は画技的には充分に熟達しており、周文様式継承者の作品として高い完成度を示す佳品ですが、雪舟らしい自己主張の強さは見えず、着賛者から一歩下がった控え目な画家の態度は詩画軸にふさわしいものです。

今日、雪舟の代表作とされる図が、他者の賛文から独立し、絵画として自立した画面空間を構築してしていることは、画家としての雪舟個人の自信の表れでだけでなく、絵画芸術に対する新たな認識を雪舟が中国において得たことをはっきりと示しています。

雪舟以前に流行していた詩画軸は、画面の上方に詩文の広酬が記された図ですが、その主役は絵を描く絵かきではなく、詩文の作者でした。そもそも画面上に賛文を書くこと自体は中国絵画から由来していますが、中国では画はあくまでも詩文から自立しており、賛がなければ絵が成り立たないことは原則としてありません。その点で日本の詩画軸は本家の中国絵画とはずいぶん異なっています。雪舟が中国で見た絵は、当時の絵にしても伝来していた前代の作品にしても、絵それ自体で完結し、芸術として鑑賞され、画面上には制作者である画家の名前が明記されていたことでしょう。そうした中国絵画の形式に倣ったのが冒頭に述べた四季山水図で、図は山水景観を画面一杯に描き出し、雪舟は堂々と画面上方に名前を記しています。「慧可断臂図」や「天橋立図」でも同様に充実した絵画空間が構築され、賛者を寄せ付けず、詩文を作る地位の高い文学僧の存在を感じさせない絵となっています。つまり、雪舟は画家としての自覚に目覚めた最初の鑑賞絵画制作者で、おそらくそのような意識は渡明前から持っていたのでしょうが、中国留学によって確立されたと考えられます。

彼は43歳のとき雪舟と名乗り始めますが、龍崗真圭に頼んで「雪舟二字説」を著し、雪舟の名の由緒について明らかにし、また自分の画業の記録「天開図画楼記」を、57歳と67歳の二度も、友人の文学僧に作ってもらいました。さらに76歳には、有名な「破墨山水図」を弟子宗淵に付与し、自ら長文を記しています。雪舟が当時の画家としては異例に、画業について文章を残そうとした理由を推測すると、ひとつには雪舟自身の性格によるものがありますが、それだけでなく、中国社会における画家の地位が日本よりも重要視されていたことや、中国では早くより画史類が発達し、画家の伝記も完備していたことを留学中に知ったからではないでしょうか。

これらの文献によると、画家雪舟は中国で高く評価され、都北京に上り、礼部院の中堂の壁画を描いて賞賛されたといいます。傍証となる記録がないので鵜飲みにはできませんが、まんざら可能性のないことでもなさそうです。

第一に、中華思想からみれば「外夷」(呆夫良心作「天開図画楼記」)のひとつに過ぎない東の島、日本からやってきた画家が中国の絵を善くすることに対する寛大な評価とみることができます。

また、いわば時代遅れの南宋院体画風を守ってきた日本から来た雪舟の画風は、明時代においてはかえって新鮮で、過去の画人が蘇ってきたかの驚きを当時の人々に与えたのでしょう。

中国では、流行している画風とは異なった古い様式の絵画を描いたために高い評価を受けた画家が過去にもいました。10世紀、五代南唐の画家董源は当時では珍しくなっていた著色の青緑山水図を描いて、8世紀、盛唐の大画家李思訓に例えられました。これは、中国絵画の特質に古典主義があり、過去の名画家の画風を学び、新たな創造に結び付けて行く動きの反映とみなせます。

このように、雪舟の渡った中国では、絵画の歴史が広く理解されて、様々な画風を受入れる寛容さを持っていたのです。とりわけ雪舟にとって運の良かったことは、当時は李在をはじめとする浙派の活動の盛んな時期で、南宋院体画風に対する評価も高まっていました。そのため雪舟が名声を得たといえるのです。　(藤田伸也)

李在筆　山水図　東京国立博物館蔵

雪舟筆　四季山水図(春)　東京国立博物館蔵

季刊 美のたより No.109
平成6年11月11日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.